

# 千の風になっていた弟たち

小出 公司

## 1 「問い訪ねる」の魔力

「満州開拓史」研究家、高橋健男先生（新潟県見附市）寄稿の星火方正会報11号で、昨秋哈達河開拓団の麻山事件自決名簿の記録に残る東伯母夫婦の養子になった弟二人を、新潟の兄が個人で慰霊に出かけ、65年にして念願を叶えてきたとの紹介をいただきました。この拙文は、先生が言う「人を弔う」「問い訪ねる」の言葉そのものの私の体験談です。

昨年9月20日彼岸入りに麻山の自決地を「問い訪ねた」その日から、今年の9月20日彼岸の入りまでの僅か一年の間、次から次へと新たな事象の連続でした。その新しい事象そのものは、弟達の命日から65年の年月を隔てての問い訪ねから始まってきた不思議な出来事。時空を超えた靈魂の作用には、科学を以てしても解明し難い事象の様です。

## 2 不思議な体現を顧みて

### その1 慰霊日が偶然にも彼岸入り

昨年5月、前出高橋健男先生の満州開拓団史発行を知り、弟達の死を知りえる手掛かりを求めた訪問から始まり、数多くの関連書に目を通しても、どこの記述からも何も見つかりませんでした。ただ「事件」そのものは文面からは「見るに忍びず、聞くに堪えない」まさに阿修羅の如き惨状とはこの事か、と受け止める。酷い。ならばその現地を訪ねて念仏を唱えてやらねばの思いで動く。遺骨収集までの38年間も広野に捨て置かれた屍は、晒されっぱなしのまま白骨化して散乱、浮かぼうにも浮かびきれない仏。こんな悲しい状態にしておいたとの反省も手伝って麻山行きにかかる。親しい写真仲間の知恵も借り、中国籍のRさんを通訳にお願いし、更にRさんの友人、ハルビンのKさん夫婦がこの話を応援してくれると車の協力までいただく。こんな善意の温い支えにより未知の外地ですんなり実現できたのです。

Rさん、Kさん皆さんの仕事の調整、加えて航空機の運航日からも、9月19日新潟出航、牡丹江泊、翌20日午前麻山入りと決まる。これがそもそも幸運の始まりでした。麻山街をはずれ左側は山、右側は低地の畑か、鉄道と架設電柱が続いている。青竜の駅に近づいているのかと、麻山事件の本の記述を頭に浮かべていると、山側をバイクの男性が降りてくるのが目に入る。交差場所で出会って案内役の彼女達質問する。私が頼んだのは、「65年前、日本の開拓民が500人位死んだ場所」でした。するとその答は、「それはこの上の方だ。」そしてその男性の言葉では「日本の将校が兵隊に命令して、女と子供をみんな銃で撃って殺した。」さらに、「父親が見て知っていたと子供の頃から聞かされていた」「自分の娘も旅行社に勤め、日本人を案内してきたこともあり、良く知っている。」の通訳の言葉を聞き、間違いなくその場所と確信する。その理由は、中国人には在郷軍人も兵隊も区別がついていない。日本人の子供、「麻山事件」残留孤児の証言者馬場周子さんの語った記述

にさえ、貝沼団長を日本の将校と言ひ、上野副団長を兵隊さんと言っている。この中国人男性は60歳位、125CCクラスの程度の良いバイク、この話を後日岩崎先生を訪ねた時に話したら、青竜の学校の先生かも知れないと語っておられました。

彼は、案内すると言って先導する。約1キロ先で左折山道に入る。さらに1キロ位の畑道で、「ここです。」と言う。見晴らしの利く高台、眼前北側に開けた広い畑、100～200メートル先を低地にする下り傾斜地、その周囲が大勢死んだ場所と言う。だけど畑に入るなどと言われる。拝礼場所は道端の松林と言われ、供物を揃え、灯明をともし、曹洞宗般若心経をテープにかけ、問い語り、涙しながらの念仏を唱える。弟達から負わされた兄としての務めを果たせ、肩の荷が軽くなる思いを、ふとした時に、この場面を用意してくれたのは、もしかして弟たちだったのではとの思いがする。

突然現れた山を下りるバイクの男性、実は弟達の身代わりで見張っていて落ち合い、現地まで案内させた。何となくそんな予感のする不思議な出来事。まさに千の風になっていて、すべてお見通しだったんだと。

## その2 東家の馬車に幸子（ゆきこ）さん家族同乗

2010年末発行の会報『星火方正』11号で、高橋健男先生が東家の養子2人の弟を供養のため「麻山事件」の地に立ち65年にして念願を果たした新潟の兄がいる、との紹介文によって65年間眠っていた記憶を甦らせたと言う北海道の鈴木幸子さん（旧姓 高橋）が、その新潟の東さんの馬車に乗せてもらって哈達河から麻山迄一緒だった事を不思議にも思い出したと、1月13日電話をいただく。そして3日間の逃避行のお話に接し、あの満州での弟達の死の直前を知る貴重な証人に巡り会えた、何とも嬉しい消息を届けられた幸運。

自分から知らせる事の出来ない弟達が、自分達の命を終えた地に兄を呼び、念仏をあげてもらった喜びを高橋先生に伝えさせ、文字となった『星火方正』11号の「東」「新潟」の文字に記憶を取り戻させた弟達の執念、その威力たるや凄い。この幸子さんからの「天からの声」とも取れるこのお話は、今までの書籍の何処にも触れられてない「65年目に初めて判明した事実」だった。これを私は「東家の馬車で、幸子さん家族と共にした苦難の逃避行3日間物語」と書きました。（前号の会報『星火方正』12号で紹介）

## その3 故人の弟名宛郵便

5月25日午前数通の配達された郵便の中に、一枚の葉書。表書きにびっくり。横書きの宛名、小出公司様その下、東正平様更に続けて小出元也様と3名の名前。」何と云えば良いのか不思議な感覚のまま次の文字を追う。

差出人、「夕張 由仁町岩内 岩崎スミ」これですぐに分かりました。弟達がお世話になった哈達河小学校の女の先生からでした。岩崎先生は、ソ連侵攻時たまたま東安に出張で不在だった為、家族のいる村の人達とは別行動だった事で、翌年帰国して初めて麻山の自決を知った方、と麻山事件の記述に有ったので承知していたのです。

幸子さんが、新潟の東さん家族と一緒に馬車だったとの電話で、びっくりした1月13

日の時と同じ様な不思議さを、今再び体験した事になります。

文面はこうです。「はじめまして 岩崎スミ（旧姓 畑）と申します。方正が東京の孫 駒ヶ嶺法子より最近送られ拝読いたしました その夜以来毎日毎晩 正平くん元也くん兄弟が私の頭の中に昔のまま 別れた時のままの勇壮な姿で現れて消えず かわいそうで涙とまりません……」とあります。

このお便りで、5月初め発行の『星火方正』12号を東京にいるお孫さんから届けられ、私が書いた「生と死の世界を繋いだ霊魂」の中の奇跡の生き残りの人、幸子さんと弟達東家との関係を語っていただいた不思議な因縁を取りあげた文面に、先生の66年前の気持ちを甦らせてしまったようです。弟達は先生と最期の言葉も交わずに、死別した悔しさを伝えたいとの思いを持ち続けていたものと考えられます。弟たちは、思い出してもらって小踊りしていると思います。

その先生からは、未だに弟達の死を素直に受け入れたく無い無意識な気持ちが、正平・元也宛名書きに現れたものと嬉しく解釈したところです。



<2011/7/14 岩崎スミ先生

北海道の自宅にて>

### 3 千の風になっていた弟

先生から頂いた便りの一節から「なぜか去年の今頃より 急に足が曲がらず農作業にも困難となり、足全体がはれなかなかなかよくなり 仕事捗らず ひざの中痛く 整形にかかってもよくなり そんな時6月2日朝4時きっちりに 南側カーテン締め忘れたところから 若いお顔の人が 白いヘルメットかぶった姿で 大きい声で『お婆ちゃん 何してるの』と叫ぶ声 あっ正平さんだ と急ぎ身支度をして外に出た 4時15分誰の姿もなかった その頃の日記 元也くん 正平くんのことばかり考えていた 公司兄さんから便りもきていて涙あふれ まぼろしの如く二人の姿を まぶたの中にもち続けていた その夢にしては カラー色の姿ではっきりし 元気な声も聞いたので 直感して まさ夢と信じ 日記にくわしく書いたのでした 春からの過労で大部まいていた自分がそのころから元気がでてきた あしのはれは札幌の名医にみて頂こうと思ってましたのにこの度 帯広に連れてって頂き お二人が飛行機でお帰りの翌朝 私の足は一年前の細いすっきりとした 骨と皮ばかり ふとももにもしわが出来とる 自分もとの足の姿になった なぜか分かりません くすりはのんでいません……」 またほかの便りでは「二人とも本当にきちんとした行儀のよい よくお勉強のできた秀才 まこと まつこと惜しまれます……」 生前の学校生活で多分先生方に褒められていたんでしょ。その先生に礼を言いたくて、日本海を跨いで麻山から夕張 由仁町、早起きの先生宅へ、千の風になって訪れたとしか思えてなりません。

・・・・・・・・千の風になって・・・・・・・・

元の歌詞は英国の田舎に伝わる民謡と言ひ、これの訳詞・作曲したのが新井満氏。これも不思議な縁と言いますと、新井氏は私と同郷新潟出身の作家です。

秋川雅史さんの澄んだ歌声、響き渡る声量、何とも言えない大らかさ、スケールの大きい歌い方に魅了されます。

私のお墓の前で泣かないで下さい。  
そこに私はいません 眠ってなんかいません  
千の風に 千の風になって  
あの大きな空を吹きわたっています  
秋には光になって 畑にふりそそぐ  
冬にはダイヤのように きらめく雪になる  
朝は鳥になって あなたを目覚めさせる  
夜は星になって あなたを見守る

自然と流れる涙は止めようもありません。なんとも情緒豊か、爽やか心揺する詞ではありませんか。この詞を「地」でゆく、「洒落たことをやってのける弟達よ」と呼びかけたい。

#### 4 北海道へ行けとのサイン

先生宅の窓に現れた正平の姿が意味するもの、以心伝心で兄の私にすぐわかる。1月13日に幸子さんとの事が、そして今、岩崎先生との事が66年の時を経て繋げる事がで



<2011/7/15 帯広市内にて

左が岩崎先生 右が鈴木幸子さん>

きたのだから、この二人にきちんとお会いしなさいとの行動を催促するサインと受け止め、計画を組む。7月14日から三日間千歳のホテルを拠点に、広い北海道を、千の風ならぬレンタカーと、スーパー特急おぞらで、先生宅と帯広の幸子さんを訪ね廻り、満州での数年を偲ぶ貴重な邂逅をはたさせていただきました。弟達にとっての供養、これ以上のものは望めないでしょう。有り難うございました。半世紀を超えての思いを果たせたと満足し、心おきなく成仏できたと信じてやみません。

#### 5 列車移動でのエピソード

前記3項に記した、弟は千の風になっていた・・・・・・・・の中で、その頃足曲がらず・・・・・・・・の話に関係することです。実は私も右膝人工ひざ置換手術後やっと1年半経った半人前のため、次男を伴い出かけたのですが、息子は大きい役に立ちました。先生は足が痛くて曲がらず歩行不自由、駅には階段が有り、列車への乗降も絶対無理でしたので、最初から息



子に背負うことにしてもらいました。先生は、嫌とは言わず素直におぶさってくださいました。可愛い教え子の幸子さんに会える嬉しさが伺えます。先生がおぶされた話は70年前17歳哈達河に赴任した時に戻ります。月曜の朝、北海区の家から3里の道を出勤途中、濁流に架かる一本橋、可憐な日本女性の先生、足がすくんで立ち往生。そこに見知らぬ中国の青年が現れ、中国語の解らない先生を、咄嗟におんぶして河を渡してくれたことを息子に背負われたことで70年前の記憶が鮮やかに甦ったと言うめったに聞けない貴重な若き日の乙女の頃の一頁を知ることが出来ました。70年前を想起させた息子の背中も素晴らしい。あの時の駅構内での姿をほのぼのとした気持ちで思い出している。先生からその後「おんぶして下さいお心を賞します ほんの少しですがお受け取り下さい 親孝行の息子さんへ ご親切ありがとうございます おかげさまで とても良い思い出の旅となりました 日本にもこんなよい青年に育った人がいると感激でした またおいで下さい・・・」との礼状に、ここまで心を配って下さる先生のお心有難く額に飾り家宝にすると云っています。おんぶされても「教え子 幸子さん」に会いたい心待ちの訪問を、千の風の弟達が見事実現させてくれました。

あれ程痛かった先生の足が私達が新潟に戻った翌朝には、腫れがひいて痛みがとれたと言うではありませんか。これも不思議に思えます。先生の弟達に寄せてくれる心根に感謝の心込めてのお礼の現れとしか受け取れません。私にもこれと同様のことがありました。それは麻山の現地慰霊したその翌日ハルビン市内でのことでした。人工膝で歩くのがやっとの時、気が付けばいつの間にか速歩きしていたので思い掛けない回復ぶりに自分でも驚きました。麻山迄来てくれて有難うと感謝の気持ちから兄ちゃんの足早く治してやろうとしてくれたのかと、私は今でも真剣に信じています。

## 6 テレビ出演の弟たち

新潟県開拓民殉難者慰霊祭が、新潟護国神社で毎年8月9日ソ連侵攻による悲劇が始まった日に行われるのですが、今年は私の身内の消息が66年ぶりに、奇跡の生き残りの幸子さんや、正平・元也を一番良く知っている学校の先生で生存して帰国された、岩崎スミ先生からも寄せられたお話で、弟たちの生前の様子が手に取るように知ることが出来た兄の私に、お礼を込めての哈達河遺族の代表参列となりました。

主催の代表、長田末作氏（村上市荒川地区）のご配慮に感謝申し上げます。

テレビと新聞にも報道されました。「小出会社の弟2人、2才下の正平、4才下の元也養子先の哈達河開拓団伯母家族と共に、麻山事件の報ずる悲劇の一員だとの記述報道に、66年後の報道特集で伝えられたこと。テレビでは、渡満前に写された4才の正平、6才の元也の遺影が画面一杯に映し出されるのを、ニュースで目にした時、人の一生でこんな不思議な扱いに会うとは想像だにできないことでした。霊魂とは、肉体に宿る、しかし死しても独立に存在し得るものと、霊魂不滅、輪廻転生を信じさせる8月9日慰霊祭当日の日でした。

## 7 仏冥利のお盆

岩崎先生からこんな嬉しい便り

「夕張の寺の僧、孫にあたるのが来訪し麻山の皆のいる墳墓の写真（私が麻山慰霊で撮影してきた写真集をお届けしたもの）に丁重に弔意を述べ、心から身にしみる読経を長く正平くん元也くんと呼びかけ、お写真手にして、私は何ひとつ言わぬのに、心込めてのお経をとなえてくれて、一同で慰霊できました・・・」北海道でも、このように先生のお身内のお坊さんに慰めいただいて君達は「幸福者だ」と声を掛けてやりました。

## 8 TBS番組DVD録画から

昨年秋の麻山慰霊から、そろそろ1年がやって来ようとする9月13日、北海道の幸子さんから届けられたDVD。7月14日帯広訪問会席で、訪中時のビデオテープが家に有る筈だから探して送りますと言われた、そのものでした。

ただしビデオをDVDにダビングして下さったものでした。

1983年9月27日放映 『そこが知りたい』

中国残留孤児 ドキュメント

敗戦の旧満州 とあります。

ニュースキャスター 荻 昌弘

監修 中村雪子（麻山事件 著者）

ディレクター 岡庭 昇

矢島良彰 の50分作品

ナレーションに引きずり込まれる。村の様子。避難で村を後にして38年経ったのに、そのまま中国の人が使っているとのことから、弟達の70年前の日常が推し量られる。素朴そのものの村の情景、ここで暮らしていたのかと感慨深きことひとしお。（麻山慰霊時、哈達河村に辿り着けなかったものだから）

小学校グラウンドと校舎のナレーションに涙するのを覚え、元気な弟達が映ってないかと、思わず身を乗り出し画面に釘付けになりました。時代を異にする映像に若しやの淡い期待を寄せるその心、我ながらいじらしいと思ってしまいました。

麻山の自決地、38年後初めての訪中団の目にした現場の姿に涙無くは見られませんでした。慰霊の厳しい制約、その中で行われました。遠くの山々、荒涼とした原野、背丈程に伸びた雑草、その合間に散乱する白骨の数々、草藪の中に泣き崩れる声、自決の人420余人の骨、この中に正平も元也も晒されていたのかと映像に食い入りました。不憫でなりません。

「亡骸は懇ろに弔う」 10月4日毎日新聞、東日本大震災被災地の土葬犠牲者改めて丁重に火葬・・・の記事に頭を下げました。仮埋葬の遺体を掘り起こし、洗い清めるのに損傷激しく「湯かん」不能。困った敷地内のシャワーで土、カビ、松の葉など洗い流し、白装束を着せ、新しい柩に遺品や写真、手紙とともに納め火葬に送り出すとのことでした。最大で一日九体を洗ったとあります。

それに比べて君達の扱いは野晒しのまま38年、ようやく収集してそこに埋められただけ、形だけの方正墓地はあるにせよ、君達の屍の場所は麻山、靈魂は永劫にその地麻山から離れられないんだね。だから其処に来いよと呼ぶんだね。犠牲になった場所が外地でしかも【戦争】とは言え酷い死に方に巻き込ませてしまって御免ね。東日本大震災の様な吊い方もしてやれなくて許して下さい。国に代わってこの兄貴が誤るから許して下さい。

## 9 岩崎先生からの追憶記

幸子さんから頂いたDVDの件で一応閉じたのですが、10月8日配達、先生からの追憶の便りも紹介したくなり追記します。

「秋の長雨できれいな小豆も黒くなり作業も遅れ、毎晩遅く迄夜なべが続き、初雪の便りに怯え乍らの毎日です。今年は正平さん元也さんが私の家に一緒にいて下さるように思えて語りかけ、手作りのものをお供えし言葉かけながら麻山を偲び、皆亡くなってはおりません。幸ちゃんからのDVD私は骨折で一緒に行けませんでしたので見ていません。哈達河小学校の映像、身を乗り出してごらんの由、小さいながら全満一と言われた学校で、大自然の原生花園に囲まれ、兎や鹿のようにかけっこも速く機敏で生きる力を十二分に備えたかしこい生徒、その中でも際立って凛々しく勇壮だった正平・元也君二人は、とても仲良し兄弟でした。私の心の中にいつまでもしっかりと強く生きています可愛い姿・・・」

宛名には東姓がいつの間にか無くなり、小出公司・正平・元也に変わってました。多分このまま続くのでしょうか。先生のお心有難く感謝に堪えません。

最期に、せつかくこの世に生を受けた命、幼くして逝かざるを得なかった無念さを訴え続けた66年にして、恩顧を蒙った方々に兄を介して伝えることの出来た喜びを感じとれた一年でした。思いが遂げられて本当に良かったね。墓なんかにはいないんだろうね。千の風になっていつまでも皆を見守っててくれよね。

南無阿弥陀仏・・・・・・・・・・。

(こいで・こうじ：1931年、新潟県村上市（旧 神納村）生まれ。本会会員。昨秋2010年9月、麻山の集団自決現場を訪ね、哈達河小学生だった、2人の弟の現地供養の責を果たす)